

## 夏の実践研修会のご案内



**期 日** 令和8年8月5日(水) 8:50～16:00  
**内 容** ・午前 公開授業(算・体・道・国・理・外) + 教科別授業研究会(算・体・道・国・理・外)  
 ・午後 各教科等&各学年授業づくりセミナー

【日程】 8:30 8:50 9:00 9:45 10:00 10:45 11:00 12:15 13:15 15:55 16:00

受付	開会 行事	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	休憩	教科別 授業研究会	昼食	各教科等&各学年授業づくり セミナー(各70分)		閉会 行事
		算数 体育 道徳		国語 理科 外国語				ユニット 1 各教科等	ユニット 2 各学年	

**申し込み** 参加費(資料代)は1000円。(来校で一日参加される場合)  
 午後の各教科等&各学年授業づくりセミナーはオンラインでも公開します。  
 (オンライン参加は無料) 右のQRコードからお申し込みください。



**申し込み切** 令和8年7月31日(金)

※ 締め切り日以降も申し込みは可能ですが、資料準備のため、ぜひ事前申し込みをお願いいたします。なお、締め切り日以降にお弁当の注文はできません。

後援 熊本県教育委員会  
 熊本市教育委員会



## 令和8年度 研究発表会のご案内

**期 日** 令和9年2月13日(土)

### 附属小学校ホームページのご紹介

### 新しいコンテンツ続々登場!!

#### ● 実践・研究ブログ

臨場感あふれる各教科の取り組み  
 を随時更新します。



ホームページ  
<https://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/elem/> 熊大附属小 検索

### 研修会・講師に関する お問い合わせ先

授業づくりや校内研修等  
 についてご相談がござい  
 ましたら、お気軽にお声か  
 けください。本校教員が  
 お手伝いさせていただきます。お電話ま  
 たは下記アドレスよりご連絡ください。



[tkoga@educ.kumamoto-u.ac.jp](mailto:tkoga@educ.kumamoto-u.ac.jp)  
 (教頭 古閑 敏之)

### ご挨拶

日頃から本校の研究にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。  
 昨年度は、一昨年度までの研究の成果を踏まえ、「共に学びにひたる子どもと教師」という新たな研究主題を設定し、  
 集団の中での学びの在り方に着目して研究を重ねてきました。特に、学び合う集団がどのように相互に影響を及ぼ  
 し合い、子ども同士、あるいは子どもと教師の関係性が学びの深まりを生むのかを見取することに努めました。私た  
 ちが目指したのは、次のような子どもと教師の姿です。

- 対象に夢中になる子どもと、一緒に面白がりつつ他者とのつながりを自覚させる教師
- 問いの解決や思いの結実を目指して試行錯誤する中で、他者と共に新たな意味や価値を創り出す子どもとその一員として共に探究しつつ時に指揮を担う教師
- 他者との協働の足跡を想起しながら自分の学びを更新する子どもと、その更新を共に喜び「過去—現在—未来」の自己の連続性と仲間との学びの価値を自覚させる教師

このような姿を共有しながら研究を進めることで、子ども同士が学び合い、集団として成長していく姿をより具  
 体的に捉えることができるようになってきました。これらの成果を踏まえ、研究発表会では、実際の授業実践をも  
 とに、集団での学びの在り方について議論を深めることができました。ご参加いただいた皆様に、改めてお礼申し  
 上げます。

本年度も、実践研修会及び研究発表会を予定しています。ぜひ、多くの皆様にご参加いただき、皆様とともに、  
 議論が深まれば幸いです。本年度もよろしくお願い申し上げます。

熊本大学教育学部附属小学校 校長 塩村 勝典

## 対話が誘う、 深い学び

研究部長 西 沙織



昨年9月に、中央教育審議会より出された論点整理では、次期学習指導要領に向けた今後の検討の基盤となる基本的な考え方として、

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の実装
- ② 多様性の包摂
- ③ 実現可能性の確保

という3つの方向性が示され、三位一体で実現されるべきとされています。

予測困難とされる時代に、自分と違う背景や文化、個性をもつ他者と関わることは、当たり前となっており、学校は自分の考えと違う考えをもつ他者と出会う場です。そのような場で、他者の意見を聴き、寄り添いながら、ともに解決策を考えたり、自分自身をよりよく変容させたりしていくことが、ますます大切になってきます。昨年度は、一人一人が繰り返し対象とかかわる中で生まれる思いや問いを共有することで、学級全体の学びの方向付けが行われ、一人一人の学びが促進していきました。

これまでも本校は、他者との対話を大切に研究に取り組んできました。他者の意見を受け入れながら自らを振り返ることで、一人一人が自らを変容させ、知識を再構成していく、大切な営みであると考えます。

そこで今年度は、私たち教師が、子どもたち一人一人の学びの過程や変化を丁寧に見取っていくことを継続しつつ、どのような対話が生み出されると子どもたちの知識は再構成され、深い学びになるのかに焦点を当て、研究を進めていきます。

## 附属小職員一人一人が語る！

個人研究は  
ここから



## 明日の学びをもっとたのしく！

過去の実践は  
ここから



# 教科等研究紹介

## 国語科

対話を通して、言葉をひろげていく姿を目指して

木下 忠志 廣田 健生 岩崎 兼司



国語科では、言語活動に取り組む中で、子ども自らが表現と理解を往還しながら学んでいくプロセスについて研究してきました。自ら学びを進めていく姿があった一方で、他者と交流する場面では、意見を言い合うだけになったり、相手の考えを受け入れられなかったりする姿もありました。

そこで今年度は、対話を核にした授業づくりや子どもの対話能力を育む手立てについて研究を進めていきます。子どもたちが互いの違いを認め合いながら対話をしていく中で、言葉と自分とを関連付けることで言葉を捉え直し、学んでいく姿を目指します。

## 生活科

問題解決の中で、自然に対する捉えが変容する姿を目指して

芦原 玲子



1年生「ねんちようさんとなかよしミッション」では、相手意識や目的意識を明確にしながら試行錯誤を重ねる姿や、年長児だった自分を振り返って1年生として交流する意味について考える姿がありました。

本校生活科では、子どもたちの思いや願いを中心にしながら、一人一人の気付きの質が高まることを目指しています。その中で、今年度は探究し続けるたのしさを味わえるようにするために、子ども同士が関わり合うよさを感じる手立てについて探っていきます。対象や他者と繰り返し関わり合いながら、物事に対する見方が変わっていく姿を生み出していきます。

## 特別の教科・道徳

なりたい自分を更新し続ける道徳科学習

山平 恵太



昨年度、3年生「いちばんうれしいこと」(B 親切、思いやり)の実践で、やなせさんが考える「人が喜ぶことが一番嬉しい」とはどういうことか話し合いました。その上で、自分が誰に対して喜ぶことをしてみたいかを問うたことで、親切、思いやりと家族愛や友情、信頼などの関連価値とのつながりを見いだすことができました。

今年度は授業の中で子どもが自己を見つめる「静」と、考えずにはいられない問いを話し合う「動」を生み出す手立てと、今の自分をメタ的に捉え、知識を再構成していく過程でなりたい自分を更新する学びを目指します。

## 社会科

子どもが自ら社会と関わり続ける社会科学習

中川 琢麻 池田貴美隆



日々めぐるしく変化する現代社会は、予測困難かつ価値が多様化し、社会に存在する問題を解決しようとしても一つの解を導くことが難しくなっています。ゆえに、社会科の学習を通して、社会の仕組みが分かり、自分が社会にどう関わっていくか自分に問い続けることが必要だと考えます。本校社会科では、他者との対話を通して社会へのよりよい関わり方を見いだす単元づくりに取り組んでいます。特に、子どもが探究したい・解決したいと思えるような教材との合わせ方や、社会的事象を様々な立場から多角的にとらえ、考えるための手立てを中心に研究を進めていきます。

## 音楽科

音楽でつながる学びをめざして

上原 正士 馬場 美香



これまで「自ら音楽に向き合う学び」を軸に実践を重ねてきました。今年度はその視点をさらに深め、音や音楽に主体的に関わる中で生まれる「関わり合い」を大切にしていきます。音楽科学習は、音という抽象的なものを対象に、感じたことやつくりあげる音楽の方向性を話し合うため、複雑なコミュニケーションが求められる教科です。だからこそ、互いの感じ方に心を開く中で、共感が広がる学びが生まれます。私たち教師も子どもたちと音楽をたのしみながら、他者との関わり合いを大切に共感が広がる集団の学びを実現していきます。

## 外国語活動・外国語

コミュニケーションの大切さに気付く子どもを目指して

福永 真紀子 弘島 智世



昨年度は、教師が題材設定や学習環境の工夫を考えたことで、子どもが活動の意味や目的を見だし、コミュニケーションを図ることができました。その一方で、自分の英語表現のよさや伝わらなかった表現を振り返ったり、自覚したりすることには課題が残りました。

今年度は子どもがやり取りを振り返り、その中で新たに気付いたことを活用できるような場を設定していきます。そうすることで、新たな表現や伝え方に気づき、自分の伝え方を再考する子どもの姿を目指します。

## 算数科

共に数学的価値を見いだす算数科授業

内田 武瑠 津川 郷兵 嶋崎 昂



2年「どんな分数がつくれるかな?」において、図画工作科の学習と関連付けて単元の目的を共有したことで、1/4ピースや1/8ピースなどを作りたいという思いを引き出しました。そして、それらのピースの作り方を共有する中で、何をよとの大きさにするかにより作り方が異なることに気付きました。

本校算数科は、子どもたちが問いや思いをもち、繰り返し対象や他者、自己と対話する中で共に数学的価値を見いだす姿を目指します。そのために、数学の本質に迫る課題設定や対話の場の在り方について研究を進めていきます。

## 体育科

よりよい自分を追い求め、共に学びのサイクルを回す子ども

山本祐之介 富永 悠真



昨年度は遊びに親しむ中で、学級全体でやりたい姿を共有し、動きを追求していきました。その上で、そこに向かう学習の過程を一つのシートに記録することで、自分たちがどのように他者と関わってきたのかを振り返ることができるようになりました。この取り組みにより、学級全体で一つの課題に向かい、試行錯誤を重ねることができました。

今年度は、子どもたち自身が運動についての課題の発見・解決・振り返りのサイクルを回していくための研究を進めてまいります。単元や1単位時間の中で、大小さまざまなサイクルを機能させるための授業デザインや教師の手立てについて、焦点を当て探っていきます。

## 保健・健康教育

学びを行動変容につなげる健康教育

村上 朋美



5年「けがの防止」の実践では、保健の学習と臨海学校を関連させることで、より切実感をもって自分の行動に注意を向け、学びを進めることができました。臨海学校中には、学んだことを活用して状況に応じた手当をする子どもの姿が見られました。

本校の保健・健康教育では、自他の行動のよさに目を向け、健康に過ごすことの価値を見いだす学びを大切にしています。学校行事や日常生活と保健の学びを関連付け、健康に関する課題を自分事として考えられるようにし、それらの解決に向けてよりよい健康行動を実践していくことで、学びを行動変容につなげていく子どもの姿を目指します。

## 理科

問題解決の中で、自然に対する捉えが変容する姿を目指して

柿原 智明 吉田 沙也加 境目 貴秀



理科の授業において、友達と問題解決していくこととは何でしょうか。本校理科では、自然の事物・現象との関わりの中から子ども自身が新たな発見をすることのみならず、友達の手伝いを聞いたり結果の解釈を伝え合ったりという関わりの中で、子どもの自然の事物・現象に対する捉えが、より確かなものへと少しずつ変容していくことだと考えています。

そのような姿を目指し、自然の事物・現象や友達との関わりが継続するような単元構成や、自らの捉えの変容が自覚できるような学習活動について研究を進めていきます。

## 図画工作科

一人一人がつくりだす喜びを味わう授業を目指して

安田 晶子



昨年度は、題材に応じて材料や用具などの造形環境を整えつつ、子どもの姿を丁寧に見取り、声かけ等を行うことで、試行錯誤しながら工夫する子どもたちの姿につながることを確かめることができました。

今年度も、表現過程の見取りと分析を通して、その子なりのイメージや色、形との関わりを引き出します。さらに、思考の流れやつまづきを捉える中で、子ども同士の相互作用や教師との関わり方を探り、つくりだす喜びにつながる授業づくりを目指します。

## 栄養・食育

給食と教科を結び、食への関心を高める学習の展開～継続した学びを目指して～

櫛山 忍



教科等で学んだ知識や考え方をもとに自分の生活に合う食事の在り方を工夫・実践していく姿を目指します。そのために、発達段階や既習内容に応じて題材を精選し、生活場面と関連付けた単元構成にします。

また、子どもにとって身近な給食の献立を教材として活用し、日常の実践と評価を繰り返すことで、子どもの興味関心を持続させ、よりよい食習慣の定着につなげていきます。

## 国際クラス

To Make a Better International Course

大沼 賢治 小坂 聡美 横田 正美 河村 昌宏 岡松 美枝 新納ゆりか モア シーナ 松本ランディ ワリン エミリー ラゲナス シャンテル メインス アンドリス 佐野ブル アダム 陶 玠如 甲斐 旭 太田 美紀



本校では、本年度から全学年で一クラスずつ国際クラスを開設しました。全国の国立大学附属学校では初めて、一条校として学習指導要領に沿って、多くの教科等を英語での授業を行う、いわゆるイメージ教育を行っています。それまでの英語での学習経験の積み重ねがない中で、全学年一斉の開設であり、国や文化の違いを超えて日

常の学校生活を含めて英語での学びの環境をいかに効果的に創っていくかが問われています。この大きな挑戦を子どもたち、教職員、各家庭、そして大学の力を合わせて、よりよい教育環境づくりを目指します。